東京暮らし

川本三郎

潮出版社

東京暮らし

川本三郎

江苏工业学院图书馆
藏书章

潮出版社

川本三郎　かわもと・さぶろう
一九四四年東京生まれ。
評論家として活躍。
文学、映画、演劇など執筆は多方面にわたる。
「大正幻影」でサントリー学芸賞、
「荷風と東京」で読売文学賞、
「林芙美子の昭和」で桑原武夫学芸賞・
毎日出版文化賞を受賞。
近著に「旅先でヒール」「ミステリ東京」
などがある。

東京暮らし

二〇〇八年二月二十日　初版発行

著者――川本三郎
©Saburo Kawamoto 2008 printed in Japan
発行人――西原賢太郎
発行所――潮出版社
〒一〇二-八一一〇 東京都千代田区飯田橋三-一-三
電話 〇三-三二三〇-〇七八一（編集）
〇三-三二三〇-〇七四一（営業）
本文印刷
付物印刷・製本――共同印刷株式会社
ISBN978-4-267-01792-6　C0095
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。http://www.usio.co.jp

東京暮らし　もくじ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

文人たちが歩いたまち

美術館を歩いて町のなかへ——10
水の城下町・上州小幡——18
荷風と古本——27
市川時代の荷風——34
東京と猫を愛した画家、木村荘八——42
「荷風のリヨン」への旅——52
下町えれじい 鈴木清順小論——59
柴田道曲のいた時代——67
「隠れ里」を求めての町歩き——81
旧制高校的教養が羨ましい——90
駅前食堂のビール——96
東京郊外を描く 山口瞳小論——100
引用の楽しさ——109
悪魔のささやき——113

旅は映画に誘われて

歩くことから始まる――118
父親気分――130
釜山映画祭を行く 二〇〇〇年十月――134
小津映画に見いだされる「時」――150
旅は映画に誘われて――154
定番の安心感 銀座並木座のこと――161
禁止事項を作る――166

猫の尻尾に訊いてみる

又なでに来ていいでしょうか――174
公園の猫を引取った――181
ねこめしの幸せ――187
みっちゃんのお絵かき――193

青いインキに言葉をのせて

猫を見送る――200
「昔」を振り返る――203
誰かがすでに読んでいる――206
夜の散歩で――209
亡き人への祈り込めて――212
試合より記憶に残る味――215
大衆食堂――218
大阪の商店街で――221
「第三の男」を愛する日本人――224
ささやかな華やぎの時間――227
古い言葉の豊かな懐かしさ――230
夫婦、親子で一つ傘の中――233
画家と下町スケッチ――236
アジサイの季節――239

一人旅これだからやめられない――243
変わらぬ個人商店の風景――247
懐かしさ漂う「胡同」――250
二人の若い大工さん――253
ひとり旅に出る理由――257
独りを慎む――260
敗者は讃美され英雄に――264
夏の身だしなみ――267
八月は祈りの季節――270
昔の風情堪能し銭湯へ――273
梅干しで医者知らず――276
女性の一人酒――279
小さな古書店――282

カバーイラスト　小林愛美

ブックデザイン　鈴木成一デザイン室

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

文人たちが歩いたまち

美術館を歩いて町のなかへ

京橋によく出かける。

映画評論の仕事をしている人間には、この町は日常的に縁が深い。フィルムセンターがある。試写室のメディア・ボックスと美学校（第一と第二）がある。どちらの試写室もメジャーな作品ではなく日本のインディーズ系の作品や、アジアの映画の試写をするところなのでマイナー好みの人間には有難い。

試写のあと、京橋から日本橋界隈を歩く。明治屋や丸善に寄ったり、髙島屋をぶらついたりする。このあたりは銀座と同じように意外に横丁や路地が多く、そこには小さな画廊が多い。立寄ってしばし絵を眺める。

ブリヂストン美術館も近いのでよく寄る。ミレーやコロー、マネやルノワールの絵が常設されているので、三十分ほどいるだけで贅沢な気持になる。

この夏も、明治の名作、青木繁の「海の幸」の特別展があり、試写の帰りに飛び込んだ。

「海の幸」は、青木繁が若き日、千葉の南端、布良（めら）の海に出かけた時に、原始的な漁師の姿に感動してモチーフを得たという。

二十年ほど前、布良を旅した時、その海と青木繁の記念碑を見た。その旅を思い出しながら「海の幸」を眺めているうちに、南房総の漁師料理なめろう（あじをこまかく叩いて味噌やシソと混ぜた素朴な料理）が急に食べたくなった。

それで美術館のミュージアムショップで「海の幸」のポストカードを何故か買い求めたあと、近くに、なめろうを食べさせる居酒屋があることを思い出し、そこに飛び込んだ。

試写室で心地よい映画――、イタール・イオセリアーニ監督の「ここに幸あれ」を見たあと、ブリヂストン美術館で青木繁の「海の幸」を見て、それから、南房総の漁師料理なめろうを酒の肴に出してくれる小さな居酒屋に行き、一杯やる。

ささやかな東京散歩になった。
なにもパリやローマまで出かけることはないと思ってしまう。

余談だが、ブリヂストン美術館のミュージアムショップのポストカードは、いいものが揃っていた。とくに、山下新太郎の、本を読む女性を描いた「読書」は好きで、物書きの知人に著書を送られた時の礼状はこのポストカードを利用している。ところが「海の幸」展に行った時、いつものようにこれを買おうと思ったらない！売り切れたかと思ったら、もう作られていないという。
残念。ブリヂストン美術館さん、ぜひ、このポストカードを復活させて下さい。

少し、話がさかのぼる。
この（二〇〇七年）一月、八王子市夢美術館で開かれた「鈴木信太郎展」に出かけた。鈴木信太郎（明治二十八年―平成元年）は八王子に生まれた画家。
日本のアンリ・ルソーと呼びたいほど遠近法を無視したおおらかで明るい絵は、いまふうにいえば「へたうま」の魅力がある。

中央線沿線、西荻窪のおしゃれな洋菓子店こけし屋の包装紙の人形の絵は鈴木信太郎の絵。この人はまた本の装画や装幀も数多く手がけている。尾崎一雄の『芳兵衛物語』、源氏鶏太の『三等重役』、サトウ・ハチローの詩集『おかあさん』など。どれもほのぼのとしたユーモラスな絵で、とくに私小説とその奥さんののんきな貧乏暮しを描いた『芳兵衛物語』などにはよく合っている。

手元に古本屋で手に入れた『芳兵衛物語』（昭和二十八年、池田書店）があるが、パラフィン紙をかけて大事にしている。

八王子市夢美術館に出かけたのは初めて。ＪＲ八王子駅の北、歩いて十分ほどのところにある。独立した建物ではなく大きなビルのなかにあった。画廊を大きくしたようなところで、親しみやすい、くつろいだ絵を描く鈴木信太郎にふさわしい。

鈴木信太郎の絵を本格的に見るのは初めてだが、どの絵も素晴しかった。印象派の作風と素朴派の作風が溶け合っている。海や山の絵、モダン都市東京の絵、庭の絵。どれも市井の人間の暮しのなかの風景で身近かに感じられる。色では緑が鮮やかで美しい。

丸い池のある庭、その庭のアジサイとバショウ、空にいくつもアドバルーンが浮

かんだ昭和初期の有楽町界隈、サーカスの象。とりわけ、ショウウインドウにハイヒールやブーツが並んでいる靴屋の絵は面白かった。ふだん誰もが目にしながら絵に描こうとは思わない対象を、子供のような好奇心で見つめている画家の喜びが伝わってくる。

ミュージアムショップで鈴木信太郎の絵のポストカードを何枚か買い求めたあと、八王子の町を歩いた。

浅川を眺め、甲州街道沿いにあるレンガの蔵のある造り酒屋に立ち寄り、それから昭和三十年代のはじめまで遊廓があった田町の一画へ行く。現在はもう当時の面影はまるでないが、それでも木造のそれらしき家がいまは廃墟となってひっそりと木々に隠れるように建っている。歩いている人も車も少なく、夕暮れ時だったこともあり、どこか夢のなかの町のようだった。

好きな美術館のひとつに府中市美術館がある。京王線の府中駅を降り、北へ約三十分ほど歩いた府中の森公園のなかにある。

ここがいいのは、西洋の一流の画家の絵もさることながら、日本の画家を大事に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co